

平成26年度  
福島県教職員特選研究論文集



福島県教育委員会

# はじめに

本研究論文の募集は、教職員の自主的な研究を奨励し、効果的な実践や先進的な取組を研究論文としてまとめることを通して研修意欲や専門性を高め、教職員個々の資質の向上を図ることを目的として実施しているものであり、昭和46年度の第1回から本年度で43回を数えます。その長い歴史の中で、数多くの教職員がその時代を反映した様々な教育課題に真正面から取り組み、貴重な成果を発表してこられました。

平成23年度は東日本大震災及び原発事故により、募集を行いませんでしたが、平成24年度から募集を再開し、平成26年度は、各教科、特別活動、教育課程、特別支援教育、学校給食、学習指導法など、様々な教科・領域にわたる論文が35点寄せられました。ここに収められた論文は、これらの中から、慎重な審査を経て特選に選ばれたものであります。

福島県は今、未曾有の災害から、復旧・復興に向けて県民一丸となって邁進しているところであります。「何より重要なのは人づくりである」ことを再確認し、未来の福島県を支える人材の育成に向け、日々の学校教育で児童生徒に「生き抜く力」を育てていかなければなりません。

このような中であって、いずれの研究もそれぞれの学校、学級及び教科等の課題を的確にとらえながら、指導方法・内容の質的改善を図った優れた実践研究として高い評価を得たものであり、各学校が抱える学習指導上の様々な課題の解決へ向け、具体的な示唆を与えるものであります。

最後になりますが、応募されました皆様の御努力に心から敬意を表しますとともに、本県教職員の研修意欲や専門性がさらに高まり、結果として、児童生徒の「生き抜く力」の育成に結び付いていくことを期待いたします。

本県の復興・再生を共に担う人づくりのために、各学校におかれましては、これらの研究成果を参考として実践し、研究をさらに深められ、今後の本県学校教育の充実・改善に大いに役立てていただきたいと思います。

平成27年3月

福島県教育庁義務教育課長

飯村新市

# 目 次

はじめに

平成26年度福島県教職員研究論文入賞者一覧・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1

## 特選研究論文

### ○ 社 会

地域に対する誇りと愛情をもつ児童の育成  
～社会科 第4学年 地域素材の活用を通して～・・・・・・・・・・・・ 2  
伊達市立保原小学校 教諭 石川 淳

### ○ 教育課程

「只見愛」を育む教育課程の創造  
～「只見学」を中核とした持続発展教育をとおして～・・・・・・・・・・・・ 6  
只見町立朝日小学校 代表 荒川 文雄

### ○ 学習指導

新たな「学び」の創造Ⅲ  
～想いを形にできる表現力の育成を目指して～（3ヶ年計画第3年次）・・ 10  
郡山市立郡山第二中学校 代表 齋藤 義益

### ○ 学習指導

『自ら学ぶ児童の育成』複式指導における言語活動の充実・・・・・・・・ 14  
～言葉を意識した学び合いを通して～  
鮫川村立青生野小学校 代表 遠藤 真由美

審査の観点及び審査総評・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 18

◇ 平成26年度福島県教職員研究論文応募状況・・・・・・・・・・・・・・・・ 19

◇ 平成26年度福島県教職員研究論文応募者一覧・・・・・・・・・・・・ 20

おわりに

## 平成26年度 福島県教職員研究論文入賞者一覧

### 【特選】

領域等	個人 団体	学 校 名	職 名 ・ 氏 名	よみがな	研 究 主 題
学習指導 (社会科)	個人	伊達市立保原小学校	教諭 石川 淳	いしかわ じゅん	地域に対する誇りと愛情をもつ児童の育成 ～社会科 第4学年 地域素材の活用を通して～
教育課程	団体	只見町立朝日小学校	(代表) 校長 荒川 文雄	あらかわ ふみお	「只見愛」を育む教育課程の創造 ～「只見学」を中核とした持続発展教育をとおして～
学習指導	団体	郡山市立郡山第二中学校	(代表) 校長 齋藤 義益	さいとう よしえき	新たな「学び」の創造Ⅲ ～想いを形にできる表現力の育成を目指して～(3ヶ年計画 第3年次)
学習指導	団体	鮫川村立青生野小学校	(代表) 校長 遠藤 真由美	えんどう まゆみ	『自ら学ぶ児童の育成』複式指導における言語活動の充実 ～言葉を意識した学び合いを通して～

### 【入選】

領域等	個人 団体	学 校 名	職 名 ・ 氏 名	よみがな	研 究 主 題
学習指導 (算数科)	団体	矢祭町立関岡小学校	(代表) 校長 吉田 幹男	よしだ みきお	数学的な考え方や見方を高める子どもを育てる
学習指導 (算数科)	団体	矢祭町立内川小学校	(代表) 校長 小川 尚子	おがわ なおこ	数学的な考え方を高め表現力を育てる学習指導のあり方
学習指導	団体	矢吹町立矢吹中学校	(代表) 校長 箭内 三紀夫	やない みきお	生徒一人一人に確かな学力を身につけさせるにはどうあればよいか
特別支援教育	個人	福島県立相馬養護学校小学部	教諭 田中 紀彦	たなか のりひこ	「地域で共に学び、共に生きる教育につなげる、児童主体の交流及び共同学習の実現をめざして」～学校間交流・居住地校交流におけるタブレット端末を活用した取組を通して～
学習指導	団体	伊達市立保原小学校	(代表) 校長 佐藤 義仁	さとう よしひと	人とかかわりながら課題を解決できる子どもの育成 －『学び合い』を中心として－
学習指導 (社会科)	個人	郡山市立根木屋小学校	教諭 須田 英明	すだ ひであき	歴史的事象をより広い視野にたって考えることのできる児童の育成 ～社会科小単元構想シートの活用を通して～
学習指導	団体	郡山市立郡山第四中学校	(代表) 校長 志村 隆弘	しむら たかひろ	紡ぎ合い、高め合える生徒の育成 ～集団の中で、自ら考え、思いを伝え合う能力を高める授業はどうあればよいか～

### 【奨励賞】

領域等	個人 団体	学 校 名	職 名 ・ 氏 名	よみがな	研 究 主 題
学習指導 (体育科)	個人	郡山市立小泉小学校	教諭 芳賀 裕	はが ゆたか	「少人数グループで、技能のポイントをもとにした学び合いの場を意図的に設定することで、技能を身につける器械運動の指導」 ～マット運動と鉄棒運動の指導を通して～
特別支援教育	グループ	福島県立聾学校研究グループ	(代表) 教諭 飯塚 和也	いいつか かずや	聴覚障がい教育におけるFM補聴システムの活用について
学習指導	団体	川俣町立川俣中学校	(代表) 校長 高橋 友幸	たかはし ともゆき	「確かな学力」の向上を目指した教科指導の工夫 ～思考力・判断力・表現力を育む学習指導を通して～

## 研究主題

# 地域に対する誇りと愛情をもつ児童の育成 ～ 社会科 第4学年 地域素材の活用を通して ～



伊達市立保原小学校 教諭 石川 淳

## 1 主題設定の理由

### (1) 学習指導要領から

小学校社会科の教科の目標は、「社会生活についての理解を深め、我が国の国土と歴史に対する理解や愛情を育てることを通して、国家・社会の形成者として、その発展に貢献しようとする態度や能力を育てること」であり、「公民的資質の基礎を養うこと」を究極的なねらいとしている。

第4学年では「地域社会の社会的事象」を学習内容として取り上げるが、これをもとに、「自分たちの住んでいる地域社会を総合的に理解できるようにする」とともに、「地域社会の一員としての自覚をもち、地域社会に対する誇りと愛情を育てていくこと」が求められている。

### (2) 児童の実態より

事前アンケートを見ると、社会科の学習を好意的に受け止めている児童は多い。しかし、地域に対するとらえ方は狭く偏りがあり、十分に地域に対する理解や思いが育っていないことがわかる。広い視野から多面的に、そして総合的に地域理解を深め、誇りや愛情を育てていくことが求められる。

また、東日本大震災や原発事故から3年が過ぎる今だからこそ、福島復興を願い、そして復興を担う心豊かな児童を育てるため、福島や地元保原に対する誇りと愛情を育てていくことが必要であり、特に社会科における指導が求められる。

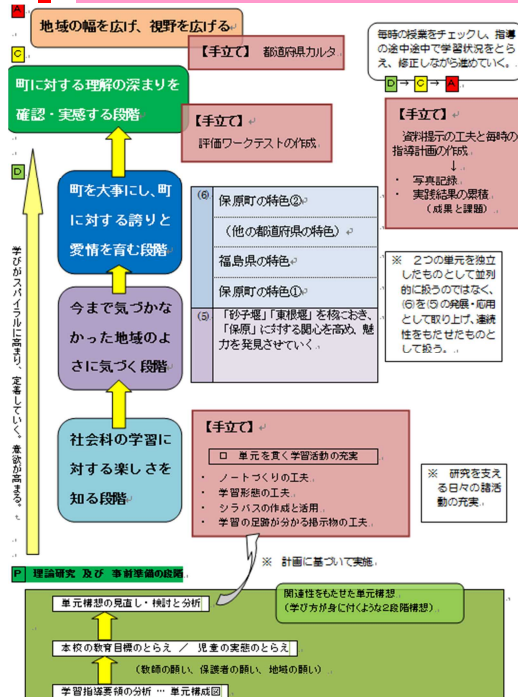
### (3) 現行の指導における課題より

指導に適した地域資料が整っていない。教科書で取り上げている事例が他県の事例であることは児童の学習意欲を高める上での課題である。また、伊達市が作成している副読資料もそれを主教材として指導に生かしていくには難しい面がある。育てたい力を確実に育てていくためには、教師側で系統立て、段階を踏んだ資料を作成し、指導に生かしていくことが求められる。

## 2 仮説

社会科第4学年の地域素材を扱う学習において、PDCAの学習サイクルで以下の手立てを講じれば、地域に対する誇りと愛情をもった児童を育てることができるだろう。

- P ① 単元構想の工夫
- ② 教科書を補う自作教材の作成
- D ① 単元を貫く学習活動をもとにした言語活動の充実
- ② ねらいを明確にした資料提示の工夫
- C ① 自作のワークテストによる評価の工夫
- A ① 都道府県カルタを活用した補充の工夫



※ PDCAのサイクルを意識し、機能させるために単元構想図に表し、実践を進めていく。

## 3 めざす児童の姿

学習を通して児童を以下のような姿に育てていくことを目指す。(なお、身近な地域の学習を通して、「理解」と「学び方」の両立を目指していく)

- ・ 地域に対する意識が高まっている姿
- ・ 地域理解に広がりが見られている姿
- ・ 地域を総合的にとらえる姿

また、「地域」を以下のようにとらえる。

- ・ 文化的・歴史的・経済的・地理的な面でまとまって形成された特徴のある集合体で、子どもの発達につながり、直接経験や活動のできる居住範囲

## 4 研究計画

### (1) 研究期間

平成25年4月～平成26年2月

### (2) 研究対象

伊達市立保原小学校 第4学年1組

### (3) 研究内容

社会科 学習指導要領 (5) (6) の内容に関する単元において。

※ (5) (6) は保原町において、地域性を生かす、適した題材であると考えます。

### (4) 研究方法

授業実践による検証を行い、めざす児童の姿に迫れたかどうかについては、アンケート、感想、作品等により評価する。

## 5 研究の実際

### (1) Pの段階

- 単元構想の工夫
- 教科書を補完する自作教材の作成

という2つの視点から研究を進めた。

地域への誇りや愛情を育てるといふねらいから、学習指導要領の(5)と(6)の内容に連続性をもたせ、一つの大きな流れの中で指導を進められるように単元構想を練った。

単元の指導方針を確立させ、時案を作成した。

ねらい	学習・指導の流れ	資料の活用等
(1) 地域に今も残る歴史や発展に尽くした人々の働きに関心をもち、 【本時のねらい】 地域に今も残る歴史や発展に尽くした人々の働きに関心をもち、	(1) 歴史名「きょう土」について知る。 ① 「きょう土」関心「の歴史を調べる」 ※ 郷土・自分が生まれた土地・育った土地、その土地 ※ 関心「一歩関心の土地に手を入れて使えるようになる」	歴史の活用
(2) 郷土「保原」について知っていることを出させ、学習事項に対する共通の土着をもたせる。	(2) 自分たちの身近に持っている歴史に関するものにはどんなものがあるか、知っていることを出し合う。 ① KJ法を用いてグループごとに調べたことを出し合う。	事前アンケートの活用
(3) これから「紙」について学習をしていくという意図をもたせる。	(3) 保原町の歴史について知る。 ① 保原町はなぜ何年何年あるのか ② 保原町の歴史事件に関する写真資料を見て、保原町の歴史について知る。(「歴史」概念の構成) ③ つづき引きの写真、 ④ 画像の写実、 ⑤ 古地図の写実、 ⑥ 家集の写実 → 「保原町の歴史」 ⑦ 地名の提示 (保原町「保原」) → 地名にも歴史に関するものがある。 ⑧ 石堀の写実 → 身近にある場所(川)に関心をもち、 ⑨ 家集の写実 → 「この歴史に関するもの」 → 「この歴史に関するもの」という学習性を感じさせる資料の提示。	ライズ 写真資料 紙しばい作り

※単元全体を貫通し、毎時の時案を作成した。



### (2) Dの段階

毎時の授業計画を立てて授業実践を行った。実践を振り返り(C)、次の指導に生かす(A)ことを考え、D→C→Aという1つのサイクルの中で指導を進めることとした。その際、授業実践では

- 単元を貫く学習活動をもとにした言語活動の充実
- ねらいを明確にした資料提示の工夫

という視点から研究を進めた。

### 【単元を貫く学習活動】

「きょう土を開く・山ろくに広がる用水」では「紙しばい作り」を設定した。

紙しばいにまとめるという目標を単元はじめに提示し、そのために必要となる情報を毎時、収集することを示した。



【児童から出された課題】

砂子堰をなぜつくろうと思ったのか。	※ 使用した紙しばい(上)と児童から出された課題(下)。これにより学習の必然性が生まれた。
砂子堰をつくるためにどんな道具や材料を使ったのか。	
砂子堰はどうやってつくったのか。(つくり方)	
砂子堰をつくるためにどんな人が協力したのか。	

学習前半で、砂子堰をもとに学び方をとらえさせ、後半は自分の力で東根堰の「紙しばい」を作ることとした。

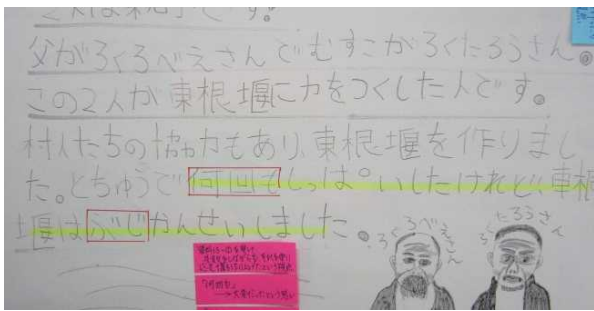
実際の学習では、自分で観点や項目を設定する姿が見られ、「堰づくりの道具」や「先人の苦勞・努力」など、学習で取り上げた「紙しばい」の構成要素が、後段の学習の構成に生かされ、表現された。

構成要素やキーワードとなる言葉を、自分で選び、つなぎ合わせて表現する姿が見られたことは、「紙しばい」という学習活動で目標をもたせ、計画的に指導してきた成果であるにとらえる。

時案には、どのような手立てや資料を用いて、何に留意して指導にあたるかを明記した。

自作教材の作成では、指導効果を高め、社会科の目標に、より迫ることが可能であると考え、自分たちの住む地域(保原)を取り上げて教材を作り、指導に用いた。

単元の学習内容に連続性をもたせるダイナミックな単元構想を立てることにより、児童の目をより地域に向けさせ、地域への誇りや愛情を継続的に育て、児童の興味関心を高めることができた。



※学習活動のまとめ「紙しばい」作り

後半の「県の広がり」「特色ある地域と人々の暮らし」では、単元を貫く学習活動として「パンフレット作り」「レポートの作成」「教科書作り」「マンガ作り」を設定した。多様な表現方法で児童の関心意欲を高め、表現力向上につなげることをねらいとした。学びの姿を次の学習に生かし、学びに連続性が生まれるように単元を構成した。

多様な学習活動を設定することで児童の言語活動が充実し、言語力の向上にもつながった。

単元全体を見据え、本時、または、単元での着地点を明確にする中で、どこで、どのような力を付けさせるかという指導の見通しをもち、計画的に指導を進めてきた成果と感じる。

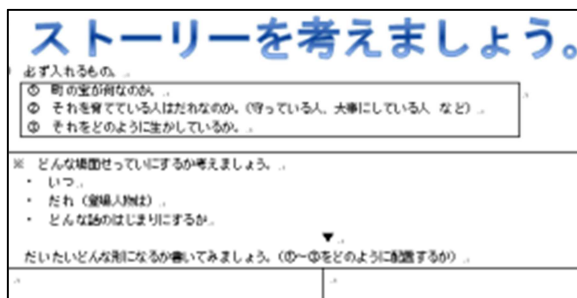
きょう土を開く 学習シラバス。

なお、単元を貫く学習活動を行う際、学習効果を補うため「学習シラバス」を活用した。「学び方」が身に付いてくると、単元での調べ学習

はじめ	<input type="checkbox"/> 保原町にはどんな歴史があるの？
砂子堰	<input type="checkbox"/> 砂子堰って何？ ・ 川と「堰」ってどう違うの？ ・ 保原町ってどんな土地なの？
	<input type="checkbox"/> 砂子堰ってどんなものなの？ ・ いつ、どこで、だれが つくったの？ ・ 長さは何センチあるの？ ・ 何年かかってつくったの？ ・ どこから水を取っているの？
	<input type="checkbox"/> なぜ砂子堰をつくったの？ <input type="checkbox"/> 砂子堰をつくる時にはどんな道具を使ったの？ <input type="checkbox"/> 砂子堰をつくるためにどんな苦労や工夫があったの？ <input type="checkbox"/> 人々の生活はどう変わったの？ ※ 砂子堰の学習をもとに自分たちで学習を進めます。
東根堰	

やまとめの学習については、児童に委ねる部分が生まれ、児童の計画に任せながら学習を進めることが可能になった。児童自身もPDCAサイクルを意識するようになり、途中で軌道を修正しながら、自分の進度に応じた学習計画の立て直しをする姿なども見られた。

シラバスと同様に、学習モデルの使用も児童の学び方の理解・定着の上で効果があった。児童が、活動の概要と着地点をとらえ、完成作品をイメージしながら学習できるため、作品作りのよりどころとなり、安心感をもって学習を進めることができた。



※提示した学習モデル

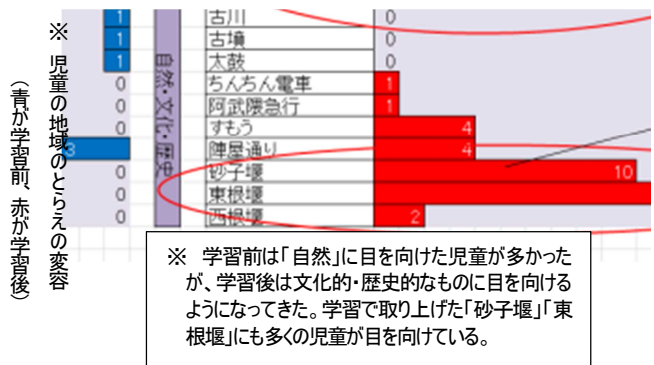
【資料提示の工夫】

資料提示では、資料に明確な意図をもたせて提示することとした。「ゆさぶり」「意外性・驚き」「納得」「興味・関心」という4つを想定し、適切なタイミングで提示することで、児童に身に付けさせたい力を定着させ、ねらいに迫っていくことを考えた。

資料提示の工夫では、意図を明確にしたことで、教師のねらった反応が児童から見られ、学習の質の向上につながった。学習への期待感が高まり、学習意欲を維持しながら、より中身の濃い、充実した学習につながった。

単元前半では、興味関心の高まりを感じさせる反応が多く見られたものが、だんだんと町の人々の立場に立って考えるという視点からの感想が生まれ、先人への感謝の気持ちを表す感想へと質の変容が見られた。地域をとらえる視点がどんどんと外に向かって広がり、単純に町をとらえるだけではなく、感謝の気持ちや「心」のつながりに気付き、「地域を大切にしよう」とする地域への愛情や「自分は～していきたい」という社会参画の意識をもった公民的な資質の基礎につながる部分が出てきた。

単元を終了後のアンケート結果を見ると、児童の学習に対する意識の高まりが見える。



※児童の地域のとらえの変容 (責が学習前、赤が学習後)

※ 学習前は「自然」に目を向けた児童が多かったが、学習後は文化的・歴史的なものに目を向けるようになってきた。学習で取り上げた「砂子堰」「東根堰」にも多くの児童が目を向けている。

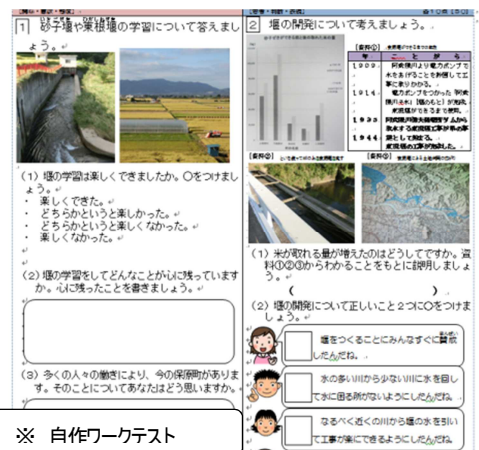
(3) Cの段階

□ 自作ワークテストによる評価の工夫

を視点に研究を進めた。

地域の実情に合わせたテストを作成することと、自作教材に

連動したワークテストの作成による指導と評価の一体化を図ること、そして、情意面の育成と学力

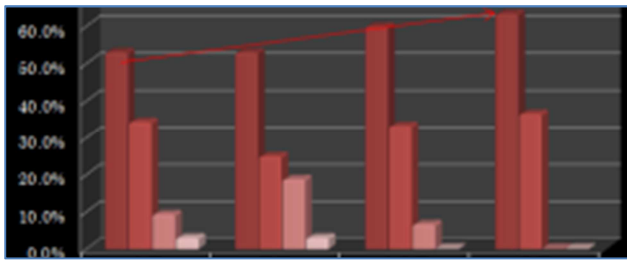


※ 自作ワークテスト

面の育成の両立を図っていくことをねらい、ワークテストを作成した。(なお、ワークテストの作成にあたっては市販の形式を参考にした)

児童が問題に取り組んだ結果を見ると、4観点の評価において、学習した内容の定着が図られたことがわかる。他県を取り上げた場合と比べ、より実感を伴った学習事項の定着につながった。

「関心・意欲・態度」の観点では、ほとんどの児童が先人たちの偉大さを認め、感謝し、町の宝として大事にしていこうという気持ちをもったことがわかり、情意面を育む上でも、大きな成果を得ることができた。



#### (4) Aの段階

授業では、D→C→Aサイクルで実践を進めてきたが、Aの段階では以下の点に視点をあてた。

#### □ 都道府県カルタを使った補充学習の工夫

今回、授業を通して高まった興味・関心・意欲をさらに高めていくことをねらい、「都道府県カルタ」を用い、楽しく学習をしていくことを計画した。

その際に、地方を限定するなど、全員が無理なく活動できるように配慮した。いつでもどこでもできる手軽さ。そして、遊びの要素と競争の要素。覚えれば覚えただけ、自分が有利になるというその単純さもあってか、楽しみながら、カルタに取り組むことができた。

### 6 成果と課題

PDCAサイクルを意識し、授業をいかに魅力あるものに充実させるか。そして、児童に付けたい力を意識し、計画的に指導することが大切である。今回の研究の主な成果と課題は以下の通りである。

#### 【主な成果】

##### (1) 社会科に対する関心・意欲の高まり

児童の社会科に対する関心・意欲が高まった。

学習に対する主体性が育ち、地域学習の前後で、社会的事象をとらえる視野が広がった。積極的に社会参画していこうという意識の高まりも見られた。

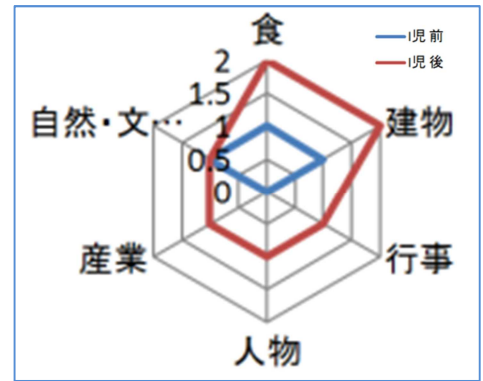
##### (2) 地域に対する知識・理解の広がり

学習の前後で児童の地域に対するとらえが大幅に拡大した。単元学習で学んだものが大幅に伸び、地域の広がりのとらえと、地域の意味付け・価値付けが図られた。

また、学習前に偏りのあった地域に対する見方が、

改善され、総合的なとらえにつながっていった。

地域をとらえる目にも幅が出てきて、広く、多面的な目で自分の住む地域をとらえることができるようになった。



※ 学習前後での児童一人一人の地域のとらえの変容

#### (3) 地域に対する誇り、愛情の育ち

学習後の児童の感想を見ると、学習前後で自分の町に対するとらえが大きく変容し、多くの児童が地域を肯定的に受け止めるようになった。地域に対する大きな愛情の育ちが感じられた。「町についてもっと知りたい」という気持ちが、先人の働きや努力を知ることでだんだん「町が好き」に変わり、「保原はすごい」と、町を誇りに思い、愛する気持ちが育ってきた。「ここに生まれてよかった」という感想が出てきたことは本研究の大きな成果である。

#### 【児童の感想から】

- 見方が変わり、保原町はすごいと思った。他の町に生まれたかったとか、別の場所に引っ越したいと思ったこともあったけど、ここ(保原町)に生まれてすごくうれしくなった。
- 保原町にはあまりいいことがないと思っていたけれど、砂子堰、東根堰や保原の歴史がわかったので、保原町はすごいなあと思った。保原町に生まれて良かったと思った。

#### 【課題】

- (1) 地域への思いが高まり、育ってきたものを、その先、どのように育て、伸ばしていけばよいか、完結型の学習で終わるのではなく、先々まで見据えた視点をもって、系統的に指導を進めていくことが今後必要である。
- (2) 高まった地域に対する思いをいかに生かしながら、「社会参画を果たしていくか」という本当の意味での実践力につなげていくことが大切である。
- (3) 地域の「人物」に対する目を育てていくことに難しさを感じた。素材をいかに見つけ出し、その業績や偉業についていかに興味関心をもたせて調べさせるかという授業実践が今後の課題である。



## 研究主題

# 「只見愛」を育む教育課程の創造

—「只見学」を中核とした持続発展教育をとおして—

福島県南会津郡只見町立朝日小学校



## I 研究の動機

### 1 地域の課題解決と「只見愛」の育成

本校は、児童79名、教職員14名の小規模校である。只見町は、新潟県との県境に位置し、日本有数の豪雪地帯である。豊かな自然に恵まれ、自然と人間が共生してきた。

しかし、只見町には、少子高齢化に伴う「自治体存続の危機」と県立高校定員割れに伴う「学ぶ意欲の喪失」という深刻な課題が2つ生じている。この2つの課題を解決するために、「只見愛」を育みたいと考えた。

「只見愛」とは、「自分に自信をもち、家族や地域に誇りをもち、夢に向かって学び続ける」態度である。

### 2 持続発展教育（ESD）の推進

只見町の豊かで広大な自然環境は、自然と人間が共生してきたことが評価され、「ユネスコエコパーク（ユネスコが認めた持続可能な社会を実現するためのモデル地域）」に認定された。

本校では、この機会に、「ユネスコスクール（ASPネットワーク）」に加盟し、持続発展教育（ESD）に取り組むことにした。

本校における持続発展教育（ESD）とは、「将来にわたって、持続可能な只見町を構築する担い手を育む教育」である。具体的には、総合的な学習の時間における「只見学」を中核として、各領域及び各教科における指導内容と関連させながら、繰り返し指導することにより「只見愛」を育てていくことをねらいとするものである。

## II 研究主題について

### 1 「只見愛」を育む教育課程とは

「自分に自信をもち、家族や地域に誇りをもち、夢に向かって学び続ける」姿を具現するために、各領域・各教科において、くり返し指導が可能なように編成・実施・評価・改善された教育課程である。

### 2 「只見学」を中核とした持続発展教育とは

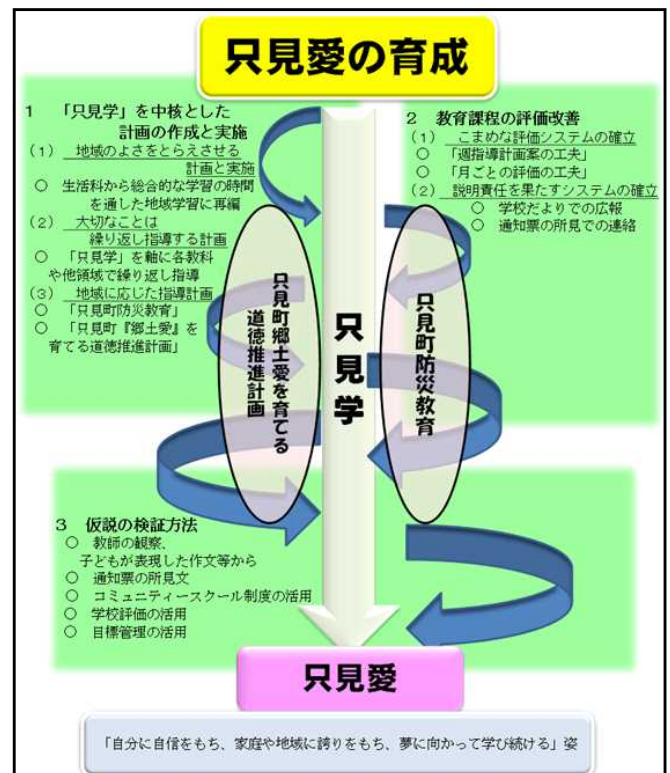
生活科から総合的な学習の時間で、只見町の自然・文化・産業・歴史などのよさを学ぶことを中心としつつ、教育課程全体で持続発展可能な地域の担い手を育む教育である。

## III 研究仮説

仮説を以下のように設定した。

めざす児童像を明確に設定し、地域のよさを体験する学習活動を中核とし、繰り返し指導ができるように、教育課程を編成・実施・評価・改善すれば、将来にわたって持続可能な地域を構築できる担い手を育成することができるであろう。

## IV 研究の内容と方法



## V 研究の実際

### 1 「只見学」を中核とした計画の作成と実施

#### (1) 地域のよさをとらえさせる計画と実施

##### ① 第1学年の実践

第1学年では、夏・秋と「公園や休耕田での活動」、冬には「雪像作り」を設定し、実践した。

地域学習と教科等での表現への指導を関連させ、自信をもって活動する姿を具現することができた。

##### ② 第2学年の実践

第2学年では、「町探検」をメインに据えながら、四季折々の地域での活動を設定し、実践した。

生活科の学習の中で、育てたい態度をくり返し称賛することで、家庭生活での態度を変容させた。

##### ③ 第3学年の実践

第3学年では、「只見の人と文化」をテーマに只見町の歳事や昔の遊びなどを学習した。

「ホウの木の葉で風車」を作る経験を生かし、学級発表会の音読劇やこぶし苑での発表などの練習をとおして、がんばりや結果を称賛した。



＜ホウの木の風車＞

その結果、自信をもって活動するようになった。

##### ④ 第4学年の実践

第4学年では、「只見の四季・自然」をテーマに只見町の動植物や田子倉湖、ブナの森などを学習する予定であったが、再編前の平成24年度に学習済みであったので、3年生と同じように、「只見の人と文化」を学習した。

##### ⑤ 第5学年の実践



＜笹巻きづくり＞

第5学年では、「只見の食と農」をテーマに只見町の米・野菜作りや郷土料理などを学習した。

「只見町内合同宿泊体験」の経験を生かし、

国語科・社会科、「稲刈り体験」、学習発表会などと関連させて指導し、よりよい交友関係を築くなど成果が見られた。

##### ⑥ 全学年共通の実践

総合的な学習の時間には、「老人ホーム訪問」や「雪祭りへの参加」などの活動が計画されている。また、「地域ボランティア活動」「なかよし活動」「スキー教室」等の学校行事との関連を図り「只見愛」を育むようにした。それぞれの活動のねらいを達成しつつ、地域とのかかわりを強くすることができた。

### ⑦ 「只見おもしろ学ガイドブック」の活用

全児童・家庭に配付になった町教育委員会刊行の「只見おもしろ学ガイドブック」を、「只見学」の資料として活用した。

また、本校の「事務だより」は、「只見学おもしろガイドブック」の内容を継続的に取り上げ紹介している。



#### (2) 大切なことは繰り返し指導する計画(第6学年)

第6学年のテーマは、「只見の歴史と未来」である。以下のような活動をとおし、最高学年としての自覚と自信をもたせるよう繰り返し指導を行った。

##### ① 実践の意図

「只見学」を中核として、只見の歴史や伝統から将来の展望までを調べ考えるとともに、目標に向かって主体的に取り組むことができるようにする。

##### ② 学級の実態

活動的ではあるが、個人差が大きく、判断力に欠ける行動も見られ、最高学年として自信をもって活動できるようにしていく必要があった。

##### ③ 実践の概要

「只見愛」を育むため、年間を見とおし、「朝日小のバトンをつなごう」から「これからの只見町」まで7つの単元で、問題解決型の活動を設定しながら、各教科・領域の活動と関連づけて指導した。

##### 「朝日小のバトンをつなごう」

学校の伝統を継承し表現することをねらいとし、学級活動・児童会・道徳と関連させた。1年生を迎える会や児童会総会の成功体験により、次への意欲と最上級生としての自信を得た。

##### 「運動会を盛り上げよう」

小学校最後の運動会を成功させるために、学校行事・体育科・学級活動・道徳と関連させた。

運動会の成功により、団結してがんばろうとする意欲がさらに強くなった。

##### 『「チーム朝日」あきらめない心でがんばろう』

陸上やスキー競技への意欲向上をねらいとし、学校行事・体育・学級活動・道徳と関連させた。

それぞれの目標達成と心をつなぐにがんばることの大切さを実感した。

##### 「只見町中から外から見てみよう」

修学旅行を契機として只見町の歴史を学び、交流会で他校の児童に伝えることをねらいとし、学校行事・国語科・社会科・道徳・町行事と関連させた。

##### 「只見の歴史に触れよう」

社会科と関連して、河井継之助記念館の見学など



## (2) 説明責任を果たすシステムの確立

### ① 学校だよりでの広報

週指導計画案に記入された「只見愛」を具現した子どもの姿は、毎週発行される学校だよりに、「今週の只見愛」という専用のコーナーを設けて紹介するようにした。

**伝統を受け継ぐ… (つる細工)**

28日(火)に、3・4年生でつる細工づくりが行われました。地域の伝統でもあり、子どもたちに受け継いでほしい技術でもあります。講師の方々に丁寧な指導をいただき、一生懸命に取り組んでいました。

子どものころに体験すると、大人になってから役に立つものです。興味を持った子は、ぜひ続けてほしいと思います。そこで、

**今週の只見愛** -36-「自分に自信を、家族や地域に誇りを、夢に向かって学び続ける」姿…

3年生の子どもたちは、感想を次のように表現しています。

- 一番おもしろかったのは、「すあみ」です。一番むずかしかったのは、「とめかた」です。4年生になったら、つる細工の伝統を引き継ぎたいです。
- でこぼこなどところあるけど、上手にできてよかったです。はじめは簡単そうでしたが、ものすごくむずかしかったです。
- 1時間くらい編んでいたら、手が痛くなりました。つるはかわいたら、水をかけることが分かりました。つるをどこに通すか分からないときに、教えてくれてありがとうございました。
- 「上、下、上、下、上、下……」のやり方を教えてくれてありがとうございました。お父さんやお母さんに教えたいです。
- 早くつる細工をしたくてワクワクしました。はじめは全然作り方が分からなかったけれど、教えてもらううちに、だんだん作れるようになってきました。これからも只見の伝統を引き継いでいきます。
- つるを編んでいるとき、なぜか楽しくなってきました。できた作品を見て、うれしくなりました。

### <学校だより「朝日」第37号より>

### ② 通知票所見での連絡

通知票の所見欄に、活動ごとにまとめられた表現、週ごとに評価した子どもの姿をもとに、「只見愛」の具現した姿を記述するようにした。

それによって、日常の教育活動と「只見愛」の育成、学期末・学年末の評価が関連し、一つにつながってきた。

## VI 研究の評価

### 1 子どもの姿から

行事や活動ごとの子どもの表現から、「只見愛」の具現した姿が見られた。通知票の所見では、児童が自信をもった姿を記し、家庭に伝えることができた。

### 2 学校評価から

児童や保護者にアンケートを実施したが、「只見愛」に関連する項目においては、90%以上が肯定的な評価をしている。特に、「只見愛」を育む取組については、93%とたいへん高い評価であった。

### 3 目標管理から

「只見愛」の育成に関して設定した自己目標の達成度は、自己評価でほとんどが「A」であった。全職員が共通理解のもと、取り組んだ結果である。

## VII 研究の成果と課題 (成果○ 課題●)

### 1 成果と課題

- 生活科での学習から、総合的な学習の時間における只見の「人と文化」「自然」「食と農」「歴史・未来」と発展していく系統性は、発達段階に適

合し、学習指導要領の内容と整合するなど、「只見愛」を育成しやすい。成果をもとに次年度の計画に生かしていきたい。

- 只見学を中核に据えて学年のテーマを設定し、各教科領域において関連指導を行うことで、繰り返し指導が可能になり「只見愛」の育成に効果的であった。
  - 地域の実態に応じた防災計画や道徳教育は、「只見愛」を育てるのに有効である。
  - 「只見愛」の具現状況をこまめに評価することで、日常的に指導につながり、達成できた。
  - 学校だよりと通知票の所見で家庭につなげたことは、「只見愛」を育む上で有効であった。
  - 只見町の「人と文化」は、「自然」と関連させて扱った方が効果的である。
  - 日常の指導・評価活動をさらに工夫し、成果を他の教科・領域にも波及させたい。
- これらは、平成26年度の教育課程編成に生かした。



### <作成・改善したESDカレンダー(第6学年)>

### 2 結論と今後の研究

以下の結論を得ることができた。

めざす児童像を明確に設定し、地域のよさを体験する学習活動を中核とし、繰り返し指導ができるように、教育課程を編成・実施・評価・改善することで、「自信」や「誇り」をもたせ「学び続ける」態度を多くの児童に具現することができる。

今後はさらに次の点に取り組みたい。

- 「自信」と「誇り」を、さらに一人一人の児童に応じて、具体的かつ強いものにしていくこと。
- 「夢に向かって学び続ける」態度を、発達段階に応じて育てていくこと。
- 「ユネスコスクール」「ESD」のよさを、最大限に活用していくこと。

## 研究主題

### 新たな学びの創造Ⅲ

～想いを形にできる表現力の育成を目指して～

郡山市立郡山第二中学校



## I 研究主題設定の理由

### 1 本県の学校教育の今日的課題から

学校教育においては、各教科の指導だけでなく、学校の全ての教育活動を通して、生徒自身が「学び」の主体となり、その学びの中で、価値あるものを自ら獲得し、獲得したものを活用して諸問題を解決できる資質や能力を生徒一人一人に育むことが、今日的課題であると考える。

### 2 本校教育目標の具現化のために

本校は、「健康・英知・友愛」を教育目標に掲げている。このうち「英知」に関しては、「創造的な学力にすぐれ、自主的に行動する生徒」を、目指す生徒像としている。特に「創造的な学力」を、「生活や学習活動の中で、さまざまな事柄に興味・関心をもち、身に付けた基礎学力を生かして、問題をよりよく解決し、新しいものを生み出す資質や能力」と定義し、生徒自身が自らの知を創りあげる資質や能力を高めていける授業の実践に努めている。

### 3 本校における過去の研究成果と課題から

本校では、平成 20～22 年度に「新たな学びの創造Ⅱ～活用力の育成による学びの質的変換を目指して～」の主題のもと共同研究に取り組んできた。教師が活用力を意識した授業を実践することで、生徒が既得の知識や技能を発展的課題や日常生活に利用したり、表現力が豊かになったりするなど、活用力の向上が実感できた。生徒の主体的な学びや活用力を向上させるには、授業の中で、内発的動機付けから始まり、実感・納得を伴う学びを経て、活用力の向上につながる「学びの連鎖」を各段階で意識した授業実践が大切であることが感じられた。この研究により、課題解決に向けた様々なアプローチを学びの連鎖の観点で見直していくことが課題となった。

そのために、生徒自身が学んだことをきっかけとして、更に興味の枠を広げ、より学びたいという意欲をもって、習得した知識・技能や経験した学びのつながりを活用して、新たな学びを自ら創造していくことのできる主体的、自立的な人間力の育成こそが重要である。そこで、自分のもつ英知を結集して課題解決に活用できる魅力ある学び、すなわち、様々な表現活動を踏まえての言語力の育成が図られる学びのあり方を追究する必要があると考えた。新たな研究として、各教

科指導において生徒の学びや生徒の想いを形に表現する力の育成を目指し、研究主題を「新たな学びの創造Ⅲ～想いを形にできる表現力の育成を目指して～」と設定し、平成 23 年度から 3 か年計画で研究を進めることにした。

## II 研究の基本的な考え方

### 1 研究のための理論

#### (1) 「新たな学び」とは

本校で主題を「新たな学び」としたのは、新たな心の動きを体験することをきっかけとして、新たな事柄だけでなく、他の単元や他の教科とも関連づけて視野を広げたり、日常生活の中で活用したりするなど、より発展的、系統的に学習活動を展開していこうと考えたからである。

#### (2) 「表現力」とは

「表現力」とは、内面的・主観的なものを外面的・感性的にとらえたり、形式によって伝達しようとしたりする力を指す。本校では、課題解決のための手段として、言語活動の充実に加え、非言語活動などの方法を自ら活用できる生徒を育てたいと考え、「表現力」を以下のように定義した。

課題解決のために、授業で学んだことや実生活で得た知識を主観的にとらえ、自分自身の理解と解釈を加えて、言語活動（記録や発表など）や非言語活動（作品・身体的動作など）を用いて自分の想いを他者に伝達することができる力。

### 2 研究のねらいと方法

#### (1) 研究のねらい

生徒の内発的動機を喚起させ、生徒が学びの主体となり、実感・納得を伴った学びの中で、価値ある知識・技能と解決方略や学び方を確実に獲得し、様々な表現活動を踏まえて、課題解決に適切に活用していく資質や能力を育成するための手だてを追究する。

#### (2) 研究の方法

研究のねらいを達成するために、3 か年計画で、1 年ごとにテーマを設定して、各教科で研究を進めることにした。

第 1 年次⇒各教科における「想い」の共通理解を図り、活用力を踏まえた「表現力」の育成のための教材研究および授業研究の実践

第2年次⇒各教科で「想いを形にできる」活動の深化を図り、教科の系統性や学び方を踏まえた「表現力」の育成を目指した教材研究および授業研究の実践

第3年次⇒各教科で「想いを形にできる」授業の評価・改善を図り、他教科や他校種とのつながりを踏まえた「表現力」の育成を目指した授業の実践

### Ⅲ 研究仮説

#### 1 研究の焦点化

日頃の授業実践を通して、実感・納得を伴う学びの中から、価値ある知識・技能や学び方を確実に獲得し、それらを適切に活用していく能力を育成するには、学びの主体である生徒自らが学ぶことの価値を見出す必要がある。昨年度まで「想い」の共通理解を図り、教科の系統性や学び方を踏まえて「表現力」を育成してきた研究を土台とし、今年度は「想いを形にできる」授業の評価・改善を図り、他教科や他校種とのつながりを考慮した「表現力」の育成に焦点をあて研究を進めることとした。

#### 2 研究仮説

課題解決における一連の探究過程において、次の手だてを講じれば、生徒の内発的動機を喚起し、系統性や連続性、発展性のある学びの中で、価値ある知識・技能や学び方のつながりを確実に獲得し、それらを課題解決に適切に活用して自分の想いを形に表現できる生徒の育成を図ることができるであろう。

(1) 生徒の思考の流れを考慮し、学ぶ必要性を感じ得る事象や場面提示を工夫し、自覚と目的意識のある学びを創造し、主体性を育てる。

(内発的動機付け)

(2) 学習材の改善や開発、課題設定の工夫を通して、実感・納得を伴う学びを創り出し、学ぶことの本質や価値に迫ることから、価値ある知識・技能を確実に獲得できる資質や能力を養う。

(実感・納得する学び)

(3) 新たに獲得した価値ある知識・技能や学び方のつながりを、既知の価値と関連付けたり、未知のものへの解明に活用したりするなど、獲得した価値ある知識・技能や学び方の有用性を感じさせ、それらを活用した連続性や系統性、発展性のある創造的な学びを培う。

(創造的な学び)

### Ⅳ 第3年次の研究の実際

#### 1 研究実践内容

研究主題、および研究仮説に迫るため、次の方略を基に、具体的な研究内容を設定し、研究を進めた。

(1) 「研究仮説(1)」についての実践

① 既知の概念との矛盾や共通性、意外性などを感じ取れる事象や場面提示、課題設定の工夫・改善を図る。

② 解決の必要性を感じ得る問題解決的学習を計画的かつ継続的に取り入れる。

(2) 「研究仮説(2)」についての実践

① 小中高校での学習材の系統性と連続性を確認し、単元や領域、校種の枠を超えた系統性と連続性のある、学習材や課題設定の開発や工夫・改善を図る。

② 生徒の実感・納得を促したり、補完したりするための効果的な手だてや支援のあり方についての方策を探る。

(3) 「研究仮説(3)」についての実践

① 自分の想いや学びの成果をグループや全体の場で表現したり、発表したりする活動と、生徒自身によるまとめや一般化を図る活動を通して、自己評価や相互評価のあり方の工夫、改善を図る。

② 既得の知識・技能や解決方略、表現方法等の有用性と他教科・他校種との関連を踏まえ、活用できる系統的・発展的な学習活動の工夫・改善を図る。

#### 2 各教科における研究実践

研究実践内容を受け、各教科において研究テーマを設定し、研究を進めた。

(1) 国語科 研究テーマ

「伝え合い、高め合う」授業の創造  
～言語を適切に活用し、  
表現力を高める学習を目指して～

(2) 社会科 研究テーマ

表現力を育む授業の工夫

(3) 数学科 研究テーマ

生徒の数学的思考がみえる授業の創造

(4) 理科 研究テーマ

生徒自らが学びの主体となる授業の創造  
～実感、納得、感動できる学びを通して～

(5) 英語科 研究テーマ

実践的コミュニケーション能力を育む授業の創造  
～お互いの想いを伝え合うことができる  
表現力の育成を通して～

(6) 音楽科 研究テーマ

個が生きる授業の創造  
～豊かな表現力を身に付け、  
創造的な音楽活動の展開を目指して～

(7) 美術科 研究テーマ

思いや感じたことを伝えるための表現力の育成  
～言語的活動を視覚的表現に生かす展開の工夫～

(8) 保健体育科 研究テーマ



生徒自らが学びの主体となる授業の創造  
～実感、納得、感動できる学びを通して～

### (9) 技術・家庭科 研究テーマ

学びを実感し、進んで実生活に生かそうとする実践的態度を育む学習指導はどうあればよいか～生活の中の課題を捉え、よりよい生活を目指す学習過程の工夫～

## 3 各教科における研究の考察

### (1) 「研究仮説(1)」についての考察

- ① 資料を工夫することで既習事項の確認や心情の解釈を意欲的に進めさせることができた。また、ブレンストーミングの活用や課題の改変により生徒の学習意欲を喚起することができた。【国語科】
- ② 前時の確認やノートづくり、色分けによる意味づけを行うことにより、まとめる力を伸ばし、基礎基本の定着につなげることができた。【社会科】
- ③ 既習事項を確認し、スモールステップを意識した課題提示により、生徒が自発的に考えることができた。また、課題の工夫により生徒の興味や探究意欲を高めることができた。【数学科】
- ④ 体験や実験を通して生徒に事象についての気づきを起こさせ、課題解決につなげたことにより、主体的に学ぼうとする意欲が生まれ、自分の考えを持つことができた。【理科】
- ⑤ 意図的に既習事項を復習させ、関連性を意識させることで、相手や場面に応じた英語を駆使しようとする意欲を喚起させることができた。【英語科】
- ⑥ 和楽器の表現活動において、基礎的な奏法を創作表現活動に活かし、積極的に演奏しようとする意欲が向上した。【音楽科】
- ⑦ 今後の制作意欲が高まるような参考作品を提示したり、発想段階でのグループ活動を意識的に取り入れたりしたことで、具体的な目標や自信を持って表現することができた。【美術科】
- ⑧ コミュニケーションスキルの向上により表現力が増し、チームとしての積極性が生まれ、意欲的に活動しようとする姿勢につながった。【保健体育科】
- ⑨ 他領域、他教科で学んだことを想起させ、関連性を示すことで、生徒は実践でそれらを生かし、工夫しようとする意欲につながった。【技術・家庭科】

### (2) 「研究仮説(2)」についての考察

- ① 個人の表現活動から集団の表現活動へという段階的な流れの確立が、学ぶ意欲と表現力の向上につながった。【国語科】
- ② 意見交換を取り入れることで、学び合う雰囲気が高まった。また、教えて考えさせる授業構成で発展

課題に取り組むことで、社会認識の深まりが見られた。【社会科】

- ③ 知的好奇心を揺さぶる課題提示や図形における操作活動、生徒同士の発表活動を取り入れることで、実感と納得が伴った理解につなげることができた。



【数学科】

- ④ 何を観察・測定し、何を考えるのかという点を明確にしたり、定型文を使って考えを練り上げさせたりすることで、実感と納得を伴って理解を深めることができた。【理科】

- ⑤ 生活に根ざす題材を取り扱うことにより、新出表現の有用性と学ぶ必然性を実感させることができた。【英語科】



- ⑥ 主体的な活動を多く取り入れるとともに、基礎事項の学習を積み重ねることで、専門的な知識を身に付け活用できるようになった。【音楽科】
- ⑦ 3年間を見通し、題材を関連付けることで、基本的な技能の定着が高められた。【美術科】

- ⑧ バasketボールの練習において、毎時間のめあてを段階的・系統的に立案したことにより、生徒は自分の技能向上を実感しながら進めることができた。【保健体育科】

- ⑨ 日常の見過ごしがちな内容を教材化し、一人ひとりが実物資料を使って学習することで、実感・納得を伴った学びが展開できた。【技術・家庭科】

### (3) 「研究仮説(3)」についての考察

- ① 伝え合うことの大切さを認識できるよう、交流の場を意図的に取り入れることで、話し合いの場を学びの深化の場とすることができた。【国語科】
- ② 日常生活と関連した課題や発展課題を積極的に授業に取り入れることで、生徒の意欲が喚起された。【社会科】



- ③ まとめにおいて相手に説明したり教え合いをしたりすることで、生徒の表現力の育成が図られ、数学的な思考力が高まった。学習シラバスを活用し、振り返りや学びの確認をすることができた。【数学科】
- ④ 学習形態を工夫し、考えを練り上げる場を設定することにより、自分の考えを発表修正し、深めることができた。【理科】
- ⑤ 活動を振り返る場を設定することで、「できた」「書けた」という達成感を味わわせることができた。【英語科】

- ⑥ 生徒が課題意識を明確に持って授業に臨むことで、個々が技能の向上について実感することができた。

【音楽科】

- ⑦ 参考作品の鑑賞の時間を設け、違った視点を提示することにより鑑賞の視点が広がり、新しい気づきにつながった。

【美術科】

- ⑧ ホワイトボードを使用することで、めあてや作戦が見やすくなり、周囲とのつながりを感じながら達成感・感動を味わうことができた。



【保健体育科】

- ⑨ 授業を振り返るまとめの時間を十分に確保し、想いを自由に記述させることで、生徒の実態を把握することができ、発展的な学習支援につなげることができた。

【技術・家庭科】

## V 第3年次の研究成果

今年度は、今までの研究のまとめとして、各教科で「想いを形にできる」授業の評価・改善を行ってきた。その結果、「各教科における研究の考察」にあるような成果が見られた。以下に第3年次の研究成果を述べる。

### ① 授業における成果

授業では、学習内容の練り上げやまとめの段階において小集団での話し合いを活用したり、学習過程において既習事項を活用して考えを深める場を設定したりすることで、生徒の自発的な学びを喚起し、自分の言葉や作品で伝えようとする態度を培うことができた。このような授業を継続することにより、生徒の「表現力」を高めることができたと考ええる。

### ② 生徒アンケートからみえた成果

本年度は、生徒の意識を調査するためにアンケートを実施した。5月と12月の生徒アンケートを比較すると、多くの項目で4の段階の生徒が増え、「表現力」を高めることができた実感していることがわかる。日々の授業の中で、各教科で定義した「表現力」の育成に向けた実践を継続させた結果であると考ええる。

### ③ 教師の授業改善についての成果

毎日の授業の中で「どのように生徒の表現力を高めるか」という課題を常に持つことで、教師自身の授業改善にもつながったと思われる。具体的な言語活動を取り入れながら、どうやって生徒の学びたいという気持ちを高めるか、学習内容を確実に理解させるにはどのように教えるか、学習内容が他教科・他校種とどのようにつながっているかなど、今後も授業を考える上で、非常に重要な視点を身につけることができた。

これらの成果より、生徒、教師の両方にとって、有意義な一年であったと考える。

## VI 3年間の研究成果

本研究は3年計画として、「表現力」を内発的動機付け、実感・納得する学び、創造的な学びという3つの面から育成することを目標として進めてきた。生徒の表現力を高める方法は様々であり、教科によっても異なるため、各教科で表現力について定義し、その力を高めるために全員が研究授業を実施した。

授業の過程の中に、生徒が学ぶ必要性を感じるような課題を提示し、学習内容の確実な定着と納得につながる学習の仕方を工夫し、学んだことが次の学びへの意欲につながるよう系統性を意識して授業を行ったことで、多くの生徒が学習内容を自分でまとめ、その内容を正しく伝え、自分の想いを表現できるようになった。このことは、生徒へのアンケート結果からも読みとることができる。

表現力を育成するための授業を教師一人ひとりが考え、実践し、改善、継続して支援することにより、生徒は学んだ知識を正しく活用し、様々な方法で自らの想いを伝えることができるようになったと思われる。生徒の9割が「中学校で『自分の思い』を表現できるようになった」と感じていることから、本研究の仮説は支持されたと考える。

## VII 今後の課題

3か年の研究で、生徒が自分の想いを形にできる表現力の育成を目指して実践を進めてきた。様々な方策により、生徒の表現力を高めることができた。その表現力を定着、そして更に向上させるためには、生徒が自ら学びのつながりを見出し、学びを表現できる授業を常に我々教師は意識していかなければならないと考える。また、表現力を「発言や話し合いで積極的に話をする力」と捉えている生徒もまだ多いため、それ以外の非言語活動を含めた様々な表現力もあるのだということを生徒に伝え、多面的な活動を今後も支援していかなければならないと考える。

## VIII おわりに

本校では、長年に渡り「新たな『学び』の創造」という主題を設定し、内発的動機付けによる学びの質的変換、活用力の育成、表現力の育成の研究実践を行ってきた。内発的動機付けを高める授業により生徒の学びが主体的なものとなり、クロスカリキュラムや小中連携の授業研究を通して、活用力も高めることができたと考ええる。

これからの時代、社会を生き抜くために、言語活動だけでなく様々な力を身に付けさせなければならない。来年度以降の研究においても、我々教員が常に課題意識を持ち、研鑽を重ねていきたいと考える。



## 研究主題

### 自ら学ぶ児童の育成

### 複式指導における言語活動の充実

～言葉を意識した学び合いを通して～

東白川郡鮫川村立青生野小学校



## I 研究主題設定の理由

### 1 今日課題から

今日「知識基盤社会」を担う子どもたちに求められているのは、「生きる力」である。学習指導要領では、「生きる力」の育成のために、知・徳・体のバランスとともに、基礎的・基本的な知識・技能、柔軟な思考力・判断力・表現力等、及び学習意欲を重視している。学校教育においては、これらを調和的にはぐくむきめ細かい指導が求められている。

学習指導要領解説国語編には、言語に関して、「国語科については、言語の教育としての立場を一層重視し、実生活で生きてはたらき、各教科の学習の基本ともなる国語の能力を身に付ける。」と明記されている。さらに、改善の具体的事項には、「各領域では、日常生活に必要とされる対話、記録、報告、要約、説明、感想などの言語活動を行う能力を確実に身に付けることができるよう、継続的に指導していく。」と書かれている。

このように、生きる力をはぐくむための学習活動の基盤となるものは、言語であり、特に国語科の果たす役割は大きい。本校においても、基礎・基本の習得、課題解決能力の向上、学習意欲の向上等を目指すために、国語科の授業を質的に改善することが生きる力の育成につながると考えた。

### 2 本校の教育目標から

本校では「たくましい体・確かな学力・豊かな心をもち、主体的に行動できる子ども」を教育目標とし日々の教育活動を展開している。「確かな学力」においては、進んで解決を図り、基礎・基本を身に付け、意欲的に学習に取り組む子どもの育成を目指している。

### 3 児童の実態から

本校は、全校児童13名の完全複式小規模校である。保護者や地域の方々は、地域の中で子どもを育てようと各種行事に積極的に参加している。児童の実態は、以下の通りである。

- 学力は、個人差はあるが、ほぼ全国平均。与えられた課題に対して、まじめに取り組むことができる。
- 自分の思いや考えを分かりやすく書いたり話したりすることが苦手である。
- 既習事項を生かし解決しようとする意識が薄い。

### 4 これまでの研究とのかかわり

本校では、平成23年度から「自ら学ぶ児童の育成」の主題のもとで、実践研究に取り組んできた。

本年度は、1・2年次の成果をベースに「確かな学力」、特に思考力・判断力・表現力を高めさせたいと考えた。そのためには、「言語活動の充実」が欠かせない。3年次の本年度は、複式という限られた指導体制の中で、言葉を意識し学び合える言語活動を充実させ、本研究主題に迫っていきたいと考えた。

## II 研究主題について

### 1 本主題「自ら学ぶ児童」とは

- 学習すべきことをとらえて、意欲的に学習に向かう姿
- 既習や経験を生かしながら課題を解決する姿
- 自分の考えをもち、友だちと学び合う姿

### 2 副主題

#### 「複式指導における言語活動の充実

#### ～言葉を意識した学び合いを通して～とは

「確かな学力」を育てるために、思考力・判断力・表現力等の基盤となる言語能力をはぐくむことは必須である。そこで私たちは、日常の言語活動の指導や国語科を中心とした各教科の指導の中で、基礎的・基本的な知識や技能を習得させるとともに、記録する、報告する、説明する、表現する、発表する、話し合う等の言葉を意識し学び合う言語活動を、必然性をもって行える授業を組み立てていきたいと考えた。

さらに、教科のねらいに迫る複式学級における指導展開の工夫についても研究を深めたいと考え、その視点を位置付けた。

## III 研究仮説

**視点1**言語力を支える基盤作りを大切にし、国語科の指導において、**視点2**基礎的・基本的な知識・技能を明確化し、**視点3**言葉を意識し学び合う言語活動、**視点4**複式指導における効果的な展開を工夫すれば、

「学習すべきことをとらえて、意欲的に学習に向かう姿」「既習や経験を生かしながら課題を解決する姿」「自分の考えをもち、友だちと学び合う姿」の子どもを育成することができるであろう。

## IV 研究の実際

### 1【教育活動全般における実践研究】

#### ◎視点1 言語力を支える基盤作り

##### 《実践1 暗唱・音読の実践》

##### 暗唱・音読の取組

本校では、詩や物語文の一部、俳句や古文などの様々な言語表現を音読する活動を意図的に位置付け、暗唱に取り組んできた。児童は本校オリジナルの暗唱読本である「ひびき」を用い、毎月提示される課題の暗唱に取り組み、その成果を全校集会などで発表した。



##### 《考察》

○ 暗唱を担当外の先生や、表現集会で全校生に聞いてもらう場を設定したことにより多くの人に称賛され、覚えたことに対する充実感や、合格できたことの満足感を味わうことができた。合格者の顔写真を掲示した取組も意欲喚起に効果的であった。

##### 《実践2 読書に関する実践》

##### 朝の読書と読み聞かせ

日常的に読書に親しませるために、「読書タイム」と「全職員による読み聞かせ」を日課表に位置付け、さらに、本年度は「読書マラソンカード」の実践を始めた。



「読書タイム」では、児童の目的に応じた読書環境とするため、学校蔵書の整備に努めるとともに、村図書館の移動図書との連携を強めてきた。また、「全職員による読み聞かせ」では、担任だけでなく、校長、教頭、養護、事務も実施してきた。担当者は、児童の興味を引く本、道徳的な本、新刊本等、目的を持って選び、様々なジャンルの本の読み聞かせを行った。また、「読書マラソンカード」は、児童が読書冊数を自分で記録することができるよう工夫し、意欲を持続できるようにした。

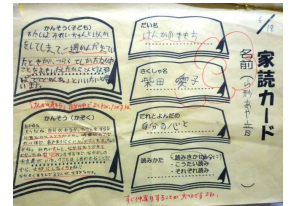
##### 《考察》

- 村図書館との連携により、児童の興味・関心や学習に応じた図書を計画的に準備することができた。このような読書環境が、児童の読書や課題追究に対する意欲の向上につながったと考える。
- 「読書マラソンカード」の活用により、年間を通して児童の読書意欲を高めることができた。また、教師は児童の読書傾向がとらえやすくなり、個に応じた読書指導ができるようになった。

##### 「家読(うちどく)」の取組

本校では、「家読(うちどく)」と呼ぶ「親子での読書活動」に力を入れている。それは、親子で同じ本を読むこと、親が子どもに読み聞かせをすることを通して、親子のふれあいの時間を確保し、言語活動の共

有化を図ることを目的としている。親子で感想を記入した「家読カード」を学校で掲示し、保護者も閲覧できるようにしている。また、この「家読」を推奨していくために、年2回「家読標語コンテスト」を行った。



##### 《考察》

○ 「家読」や「家読標語コンテスト」を通して、親子の会話が増えるとともに、家庭読書の習慣化が図られてきた。「家読カード」では、児童が本の内容と学校での出来事を重ね合わせて感想を書き、親がそのことに関し共感したことを書くなど、児童の内面的な心の成長に寄り添うような記述も見られた。

##### 《実践3 表現力をはぐくむ実践》

##### 表現集会の取組

毎週全校生で行っている「表現集会」の目的は、相手に向かって表現することを通して「言葉を意識して『話す・聞く』力」をはぐくむことである。内容は、暗唱読本「ひびき」の発表、国語科で学習した音読発表、社会科で書いた新聞の記事発表、音楽科で学習した合唱・合奏の発表等である。発表後、感想を交流する場を設定し、良い点を具体的に認め合っている。



##### 《考察》

- 全校生に向かって発表するという場が、毎週1回必ず確保されていることで、児童は相手意識や目的意識をもちながら表現を工夫することができた。
- 発表後、良い点や課題点について交流させたことで、児童は声の抑揚や間の空け方など、より良い表現方法に気づき、自分の表現に生かすことができた。

### 2【授業を通しての実践研究】

#### ◎視点2 基礎的・基本的な知識・技能の明確化

##### 《全学年による共通実践》

指導案作成時には、単元プラン凝縮シート(出典:福島県教育センター)を活用し、学習指導要領から領域と重点化すべき指導事項を洗い出し、児童の実態や言語活動、教材と結びつけながら単元づくりを行った。このことにより、身に付けさせたい知識・技能が明らかとなり、ねらいを達成するためのより効果的な言語活動を設定することができた。

##### 《各学年の実践(第5・6学年、第3・4学年、第1・2学年)》

##### 第5学年 単元名「見立てる」「生き物は円柱形」

#### (1)視点3 言葉を意識し学び合う言語活動の工夫

本単元を貫く言語活動として「要旨をとらえ、そこから自分の考えを持って発表しよう」という活動を設定した。本時は、4つの例文から要旨に適したものを選んだり、キーワードに注目して文章を読み比べたり

することで、筆者の考えを的確にとらえられるようにした。また、感想を書く際に、字数を制限することで言葉を吟味して簡潔にまとめられるようにした。

## (2)視点4 複式指導における展開の工夫

間接指導時に、児童一人でも単元の見通しや学習活動内容を再確認できるよう、単元の学習計画や前時までの既習事項を常に確認できる場所に掲示した。

## (3)考察

○ 長い文章の中から要点を絞ってまとめることが苦手な児童にとって、短文で記した要旨の例文を提示したり、例文を複数用意し、文章比較によりキーワードに着目させたりする方法は効果的であった。

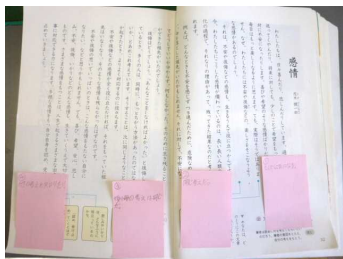
○ 学習計画や関連の既習事項を掲示したことで、一人学習時でも、学習内容を確認したり、既習内容を活用したりしながら、課題に意欲的に臨むことができた。



## 第6学年 単元名「感情」「生き物はつながりの中に」

### (1)視点3 言葉を意識し学び合う言語活動の工夫

本単元では、単元を貫く言語活動として「筆者の考えに対する自分の考えをまとめ、先生や友達に発表できるようにしよう」という活動を位置付けた。本時では、筆者の考えに対しての自分の考えを明らかにするために「文章と対話しながら読む」という学習活動を設定した。段落毎に筆者の考えに対する感想や疑問を付箋を活用して記録しておき、再度振り返って自分の考えをまとめさせるようにした。



## (2)視点4 複式指導における展開の工夫

導入時に筆者の写真や著書を提示することにより、教材文への興味・関心を高め、間接指導時の一人学びの際も意欲を持続して学習に取り組めるようにした。

## (3)考察

○ 付箋を使って児童自身の考えをその都度記録させたことで、文に即して、筆者のどの考えから、自分がどう思ったのか、つなげることができた。また、間接指導時の学習活動の見取りにも有効であった。

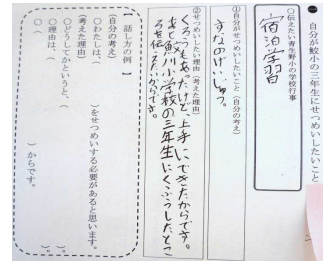
○ 教材との出会わせ方の工夫により、教材文と児童の距離が縮まり、児童は興味・関心を持ち学習に取り組むことができた。

## 第3学年 単元名「わたしたちの学校行事」

### (1)視点3 言葉を意識し学び合う言語活動の工夫

本単元を貫く言語活動として、「話し合った学校行事をまとめ、鮫川小学校の3年生と交流しよう」という活動を設定した。本時では、紹介したい学校行事の

中で、何を伝えたらよいかを話し合わせる活動を設定した。児童が自分の伝えたいことや理由について簡潔にまとめられるようなワークシートを準備し、さらに筋道を立てて話せるように、話型の見本も提示することで、自分で学習を進められるようにした。



## (2)視点4 複式指導における展開の工夫

間接指導時でも、児童が学習のねらいや内容の確認ができるように、掲示板に伝える相手や目的、学習計画表等を掲示しておいた。

## (3)考察

○ ワークシートを活用したことで、話し合う内容が明確になり、必要な内容を簡潔に伝え合うことができた。また、話型を示したことにより、発表の仕方が分かり、根拠を明確にした意見を発表することができた。

○ 学習計画表の掲示により、児童は相手や目的を意識し、話し合い活動に意欲的に取り組むことができた。

## 第4学年 単元名「だれもがかかり合えるように」

### (1)視点3 言葉を意識し学び合う言語活動の工夫

本単元では、単元を貫く言語活動として、「自分が調べた『関わり合うということ』を発表しよう」という活動を設定した。本時では、相手や目的に合った課題を自分で決定し、その課題について調べる学習を計画させた。児童の思考の流れに沿ったワークシートを準備し、スモールステップで順を追って、調べる内容や方法を書き込むことで、間接指導時でも主体的な課題解決ができるようにした。



## (2)視点4 複式指導における展開の工夫

間接指導時には、「ガイド学習」をもとに、リーダーを中心とした話し合いをさせた。

## (3)考察

○ ワークシートを活用することで、間接指導時でも児童は、課題解決学習の基本的な流れをつかみ、自分の力で課題解決をすることができた。

○ 単元を通した学習計画を掲示しておくことで、児童一人一人が学習の見通しを持ち、目的を理解しながら、自主的に学習活動に取り組むことができた。

## 第1学年 単元名「ずうっと、ずっと、大すきだよ」

### (1)視点3 言葉を意識し学び合う言語活動の工夫

本単元では、単元を貫く言語活動として「読んだ本の好きなところを紹介する」ことを位置付けた。本時

では「繰り返し」の会話文に着目して、ぼくの気持ちを深く読み取る学習活動を計画し、既習の学習や教科書の叙述に基づき、想像したぼくの気持ちをより広げられるよう、読み取ったことを交流する場を設けた。

#### (2)視点4 複式指導における展開の工夫

2学年分の単元の指導計画の中で、それぞれの学年の活動内容に軽重を付け、「ずらし」を行った。また、熊の人形をキャラクター化し、教師が児童と異なる考えを提示することにより、さらに多様な考えに触れられるようにした。



#### (3)考察

- 単元を貫く言語活動の設定と学習計画表の掲示により、本時の読みと次時の学習がどうつながるか見通しをもつことができた。また、紹介文を書く活動においても掲示物を生かすことができた。
- 人形を活用し、児童と異なる考えを提示したことにより、多様な考え方にふれることができ、児童の考えが広がった。

### 第2学年 単元名「わたしはおねえさん」

#### (1)視点3 言葉を意識し学び合う言語活動の工夫

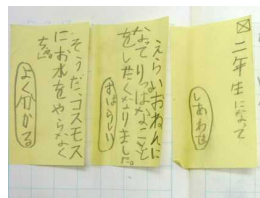
本単元を貫く言語活動として「物語を読んで感想文を書くこと」を位置付けた。本時では、心に残った場面を「心カード」に視写し交流する学習活動を計画した。単元終末には、既習を生かして、シリーズ本の中から本を選び、感想文を書いて発表する場を設けた。

#### (2)視点4 複式指導における展開の工夫

間接指導時に、「ガイド学習」に沿って、付箋を使った「心カード」の交流を行った。

#### (3)考察

- 感想を書く視点を具体的に提示したことにより、児童は単元を通して視点をもって教材文やシリーズ本を読み進めることができた。
- 学校だけでは揃えにくい図書を村図書館と連携し準備したことにより、児童により良い読書環境を提供することができた。
- 付箋紙を活用させたことで、児童は自分の考えが整理しやすくなった。また、教師不在の間接指導中であっても、交流したときの考えが残るので、児童の考えを見取る際にも有効であった。



## V 研究の成果と課題

### 視点1 言語力を支える基盤作り

- 実践1より、暗唱活動は、『意欲的に学習に向かう』のに効果的であることが分かった。詩、俳句、古文など、あらゆる分野の教材を継続して使用して

きたことで、文章に対する抵抗感が減っている。

- 実践2より、「朝の読書タイム」「読み聞かせ」「家読」は、『既習や経験を生かしながら課題を解決する』のに有効であることが分かった。それは、朝の時間や家庭において本を読むときに、授業で学んだ読みを生かせば、読書が楽しくなるということに気付く姿が見られるようになったからである。
- 実践3より、表現集会の定期的開催や集会内容の工夫は、『意欲的に学習に向かい』『友だちと学び合う』のに効果的であることが分かった。集会での発表や感想交流が、児童の「話す・聞く力」を向上させ、より理想的な発表へ近づこうとする意欲を高めることが明らかとなった。

### 視点2 基礎的・基本的な知識・技能の明確化

- 授業において「基礎的・基本的な知識・技能を明確化」することは、『言葉を意識して学び合う』のに効果的であることが分かった。また、「単元を貫く言語活動」では、その単元で身に付けさせたい国語の能力を効果的に育成することが可能になるとともに、児童自らが目的意識を持つことにより、『意欲的に学習に向かう姿』につながることが明らかになった。

### 視点3 言葉を意識し学び合う言語活動の工夫

- 「言葉を意識した言語活動の工夫」が、『既習や経験を生かしながら課題を解決する』のに有効であることが分かった。特に、複数文章の比較、既習と新出の活動の比較、記入しやすいカードの提示などの手立ては、児童の思考に寄り添い、無理なく活動を進めるのに効果的であった。

### 視点4 複式指導における展開の工夫

- 「複式指導における効果的な展開の工夫」は、『自ら学び』『友だちと学び合う』ことの一助になることが分かった。特に「ガイド学習」の内容の改善と、単元を通しての「わたり」と「ずらし」の組み合わせの工夫は、複式指導には不可欠である。

## VI 研究を振り返って

国語科の授業を軸として、学校生活の様々な場面で「言葉を意識し」、互いにコミュニケーションを図りながら「学び合う」教育活動を展開する中で、児童の読む、書く、聞く、発表する等の活動への意欲と技能を高めてきた。それらの力が、児童一人一人の生き生きと自信をもって生活する姿につながっていったことは、本研究の最も大きな成果である。

複式指導の工夫・改善や交流活動の充実等、完全複式小規模校である本校の実態から残された課題もある。これらの課題解決とこれまでの研究のさらなる質的向上をめざし、全職員による共通理解・共通実践を心がけ、研鑽を深めていきたい。

## 審査の観点及び審査総評

### 【審査の観点】

- (1) 研究の意図が明確で、主題が適切なものであるか。
- (2) 研究の対象が明確であるか。
- (3) 研究の計画及び内容が適切であるか。
- (4) 論旨が一貫しており、説得力があるか。
- (5) 必要な資料が精選され、整えられているか。
- (6) 結論の導き方は適切であるか。
- (7) 今後の実践に生かす手だてを講じているか。

### 【総 評】

東日本大震災から4年が経過しようとしている現在の学校の状況を踏まえ、一人ひとりの子どもたちに福島ならではの「生き抜く力」を育てていくことが、本県教育の喫緊の課題である。

福島ならではの「生き抜く力」を育てていくために、知の自立を目指し、思考力・判断力・表現力等を基調とした学力観や言語活動の充実を中心とした授業の質的改善を図る貴重な教育実践が数多く出品された。

特に、学校挙げての共同研究に取り組む小・中学校の各教科にまたがる研究実践が多く寄せられ、学力向上に対する各学校の積極的な取組が高く評価できる。

福島県の重要課題である高齢化・過疎化・風評被害など、大震災後の本県特有の課題に真正面から取り組んだ実践が多く、その根底に流れる「郷土愛」の育成にも、共感できるところが多い。

研究仮説や研究の視点に基づく研究の成果とまとめの相互関連は配慮されているものの、授業実践が前後の論旨の説得までたどり着いていない論文も散見された。

子どもたちの主体的な学びを見極める教師の姿を重視し、その見取りを踏まえた柔軟な子ども主体の授業展開に取り組む実践に、更に期待したい。

教師の手立ては具体的に記述されているものの、児童生徒の学びの姿を生き生きと表現している論文は、やや少ない。

## 平成26年度福島県教職員研究論文 応募状況

1 1次審査通過論文数 32点 総論文数35点

### 2 内 訳

(1) 教育事務所別(1次審査通過論文数)

県北	県中	県南	会津	南会津	相双	いわき	計
6	9	6	1	3	3	4	32

(2) 学校種別(1次審査通過論文数)

幼稚園	小学校	中学校	高等学校	特別支援学校	計
0	18	7	2	5	32

(3) 各教科、領域等及び教育事務所別内訳

	幼稚園	小学校	中学校	高等学校	特別支援学校	計	県北	県中	県南	会津	南会津	相双	いわき
国語		1				1							1
社会		4				4	3	1					
算数・数学		7				7	1		3		2		1
理科													
生活・総合													
音楽													
図画工作 美術													
体育		1				1		1					
英語													
道徳													
特活・道徳													
特別活動													
教員研修			1			1						1	
学校保健			1			1			1				
特別支援					4	4		2		1		1	
幼稚園													
技術・家庭													
学習指導 一般		3	5	1		9	2	3	2			1	1
教育課程		1				1					1		
学校給食					1	1		1					
学校経営		1		1		2		1					1
合 計	0	18	7	2	5	32	6	9	6	1	3	3	4

## 平成26年度 福島県教職員研究論文応募者一覧

領域等	個人 団体	学校名	氏名	研究主題名
国語	個人	いわき市立泉北小学校	矢内 文博	「読むこと」において一人一人が自分の考えを広げたり深めたりできる交流の授業はどうあればよいか。
社会	個人	福島市立福島第二小学校	竹田 朋彦	絆を実感し、共に学ぶ社会科学習
	個人	伊達市立保原小学校	石川 淳	地域に対する誇りと愛情をもつ児童の育成 ～社会科 第4学年 地域素材の活用を通して～
	個人	伊達市立小手小学校	川村 国央	思考力・判断力・表現力を高めながら、地域社会に対する 誇りと愛情を育てる社会科の実践
	個人	郡山市立根木屋小学校	須田 英明	歴史的事象をより広い視野にたって考えることのできる児童の育成 ～社会科小単元構想シートの活用を通して～
算数	個人	二本松市立油井小学校	根本 芳宏	算数科で学ぶ意欲を高めながら、思考力を育成する指導のあり方 ～学びを支える学習基盤づくりを通して～
	団体	矢祭町立東館小学校	矢吹 政徳	算数科における学び合い、高め合う児童の育成
	団体	矢祭町立関岡小学校	吉田 幹男	数学的な考え方や見方を高める子どもを育てる
	団体	矢祭町立内川小学校	小川 尚子	数学的な考え方を高め表現力を育てる学習指導のあり方
	団体	只見町立只見小学校	二瓶 悦子	自ら学び、ともに考えを深め合う児童の育成 ～個を見取り、学習の定着を図る工夫～
	団体	只見町立朝日小学校	荒川 文雄	学ぶ力を身につけ、ともに高め合い地域の明日を担う子どもの育成 ～活用と習得のバランスよい授業の確立と家庭学習の運動をととして～
	個人	いわき市立田人小学校	矢野 浩	一人一人の学ぶ意欲を高め、楽しく学べる算数の授業 ～「養い」「出あい」「深める」を通して～
体育	個人	郡山市立小泉小学校	芳賀 裕	「少人数グループで、技能のポイントをもとにした学び合いの場を意図的に設定することで、技能を身につける器械運動の指導」 ～マット運動と鉄棒運動の指導を通して～
学習指導	団体	福島市立平野小学校	山内 雄和	ひとみ輝かせ学ぶ児童の育成～よさを求めるすこやかな心をもち、自分の思いや考えを伝え合い、学び合う学習集団づくりをめざして～
	団体	川俣町立川俣中学校	高橋 友幸	「確かな学力」の向上を目指した教科指導の工夫 ～思考力・判断力・表現力を育む学習指導を通して～
	団体	伊達市立保原小学校	佐藤 義仁	人とかかわりながら課題を解決できる子どもの育成 ～『学び合い』を中心として～
	団体	郡山市立郡山第二中学校	齋藤 義益	新たな「学び」の創造Ⅲ ～想いを形にできる表現力の育成を目指して～(3ヶ年計画 第3年次)
	団体	郡山市立郡山第四中学校	志村 隆弘	紡ぎ合い、高め合える生徒の育成～集団の中で、自ら考え、思いを伝え合う能力を高める授業はどうあればよいか～
	団体	天栄村立天栄中学校	庄司 新一	自ら学び確かな学力を育むための学習活動の創造(3年次) ～学び合い高め合う学習集団の育成を通して～
	団体	鮫川村立青生野小学校	遠藤 真由美	『自ら学ぶ児童の育成』複式指導における言語活動の充実 ～言葉を意識した学び合いを通して～
	団体	鮫川村立鮫川小学校	芳賀 なおみ	豊かに関わり合いながら、共に高め合う子ども

	団体	矢吹町立矢吹中学校	箭内 三紀夫	生徒一人一人に確かな学力を身につけさせるにはどうあればよいか。
	団体	南相馬市立鳩原小学校	箭内 晴好	自分の考えを分かりやすく表現する支援の工夫
	グループ	福島県立いわき総合高等学校	芸術表現系列・演劇	学校設定教科「演劇」におけるワークショップ型授業の展開 ～コミュニケーション能力開発を目指した授業実践～
特別活動	個人	国見町立国見小学校	高橋 秀幸	望ましい集団活動を通して自主的、実践的な態度を育てる特別活動 ～達成感を味わい、自信をつける「チャレンジプロジェクト」の実践から～
学校経営	個人	天栄村立大里小学校	佐藤 喜彦	校内服務倫理委員会の在り方の改善 ～不祥事防止のための第三者意識の撤廃を目指して～
	個人	福島県立いわき総合高等学校	瀬谷 貢一	学校での災害発生時における避難や避難所対応について ～東日本大震災発生時の豊間小・中学校等の事例から～
特別支援教育	グループ	福島県立聾学校研究グループ	飯塚 和也	聴覚障がい教育におけるFM補聴システムの活用について
	個人	福島県立郡山養護学校	最上 俊彦	肢体不自由児の生活上の困難を克服し、コミュニケーション能力、自己有用感、学習意欲を高める技術・家庭科、工業科の指導の工夫
	団体	福島県立聾学校会津分校	小竹 靖子	「心」と「社会性」を育むための体験と言語活動を結びつけた取り組み～聴覚障がいのある児童の体育科における剣道及び言語活動の指導から～
	個人	福島県立相馬養護学校小学部	田中 紀彦	「地域で共に学び、共に生きる教育につなげる、児童主体の交流及び共同学習の実践をめざして」 ～学校間交流・居住地校交流におけるタブレット端末を活用した取組を通して～
学校給食	個人	福島県立郡山養護学校	中島 裕子	児童一人一人の発達や自立を促すための摂食指導の組織づくり
学校保健	個人	泉崎村立泉崎中学校	高橋 良子	効果的な姿勢指導の実践
教育課程	団体	只見町立朝日小学校	荒川 文雄	「只見愛」を育む教育課程の創造 ～「只見学」を中核とした持続発展教育をとおして～
教職員研修	個人	南相馬市立原町第一中学校	長階 哲哉	新採用教員の適応状況と初任者研修について～新採用教員の成長と変容等に関する研究～困難克服の戦略構築に向けて～



## おわりに

福島県教職員特選研究論文集は、県内の教育に携わっておられる教職員の優れた教育実践を奨励、普及するために発刊しており、今回で21回を数えます。

今年度は35点の応募をいただきました。応募論文からは、学習指導要領を視野に入れながら、各学校が抱える課題を的確に捉え、児童生徒の発達段階に応じた手立てを講じて育成したい資質・能力を育もうとする実践等、教師としての高い志を感じるとともに、教育の専門家としての力量を高めようとする真摯な姿勢が伝わってまいりました。

特に、入賞論文においては、確かな学力の育成、豊かな心の育成、そして、震災からの復旧・復興に積極的に児童生徒を関わらせる取組など、まさに「生き抜く力」を育成するために、適切な研究手法のもとに研究を進め、よりよい成果をあげようとする実践研究が見られました。

本論文集には、応募者全員の研究主題を掲載してありますので、今後の研究や実践の参考にしていただきたいと思います。

最後に、各学校及び教職員におかれましては、東日本大震災という未曾有の災害と幾多の困難に立ち向かいながら、目の前の児童生徒へ全身全霊で関わり、未来のふくしまを創造する人材の育成に努めていることと思います。

これからも、教育のプロとしての力をさらに磨かれるようお願いするとともに、児童生徒の夢や希望の実現に向け、次年度も幅広い教科領域・校種から、積極的に御応募くださいますようお願いいたします。

---

---

平成26年度福島県教職員特選研究論文集

平成27年3月発行

編集・発行 福島県教育委員会

---

---